

アメリカ学会会報

— The American Studies Newsletter —

No.214

April 2024

2024年大統領選挙と民主政治への疑念

西山 隆行

今年の大統領選挙は、不測の事態が起こらない限り、民主党候補はバイデン、共和党候補はトランプになるだろう。2020年選挙の再戦となる今回は、両候補ともに高齢で支持率も低い。新たな重要争点も存在しないため、11月の一般投票まで政策論争ではなく悪口合戦が続く。政治・社会の分断は、一層鮮明になるだろう。

悩ましいのは、選挙終了後も分断が進む可能性が高いことだ。選挙の勝敗は各州とワシントンDCに割り振られた選挙人の獲得数で決まるが、結果は6つの接戦州（ミシガン、ペンシルヴェニア、ウィスコンシン、ネヴァダ、アリゾナ、ジョージア）の行方次第だと予想されている。世論調査によると、それら6州のうち5州でトランプがリードしている。だが政党支持率では、4州で民主党がリードし、他の2州ではほぼ同率となっている。候補者への支持と政党支持にズレがあるため、結果予測は困難だ。最終的に支持が拮抗する場合は、第三の候補がどちらの足を引っ張るかで結果が決まる可能性すらあるだろう。

メディア関係者や学生と話をしていると、「アメリカは最終的には国民の多数派が選んだ人物が大統領になるので、なんだかんだ言っても民主的だ」というような発言を聞くことが多い。だが、この指摘は相当疑わしい。48州は相手より1票でも多くを獲得した候補が全ての選挙人を獲得する勝者総取り方式を採用しており、40を超える州では既に勝者が決まっているも同然だ。選挙結果は残りの一部の州の住民の投票で決まる。

実際、2020年には、二大政党が本格的に選挙戦を展開したのは10州と2つの下院選挙区のみだった。カリフォルニアなどに二大政党の候補が入る主目的は高額献金者との面会であり、有権者への訴えかけではない。上述の10州と2選挙区に住んでいる人は米国民の4分の1にすぎず、今回はフロリダが接戦州ではなくなるため、二大政党が真剣に選挙戦を展開する地域に居住する住民の割合は18%になるとワシントンポストは予想する。

今日では選挙技術が発達しているので、接戦州でも二大政党は、投票行動を変える可能性がある人々（投票するか否かを決めていない人や、投票先を変える可能性のある人）にしか接触しない。これら少数者の意向が選挙結果を左右しているのである。接戦州以外に居住する有権者の票は、極論すれば、投じられても投じられなくても結果に影響しないのだ。

大統領選挙の投票率は多くの場合5割程度である。その低さの背景には、有権者登録の面倒さなど様々な要因があるが、投票に行っても行かなくても結果に影響しないと分かっている人が多いこともあるだろう（逆に言えば、にもかかわらず、半数近い人が投票に行くというのは「立派」だ）。

大統領選挙では、一般投票でより多くの票を獲得した人物が大統領になれないという事態も発生している。だが、実際にはどちらかの候補を支持しているとしても「合理的」に行動した結果として棄権する人も多数存在するので、そもそも選挙結果が民意を反映しているとも言えないことは念頭に置く必要がある。

アメリカは民主主義を体現する国だとの自己認識を持っている。にもかかわらず、国民の多数派が支持する人物が当選するとは限らないことから、「選挙結果が不正に歪められた」との主張が広がる可能性がある。今回の選挙では生成AIを利用したフェイクニュースによる中傷合戦も懸念されるし、海外勢力が選挙戦に介入する可能性もある。選挙手続きの正統性や投票権剥奪に関する疑念も提起されるだろう。

アメリカは連邦制を採用しているし、多民族国家でもある。様々な意味での多元性を統合する役割を果たすと長らく期待されていた大統領選挙の結果、民主政治に対する疑念が強まり、政治・社会の分断が進むことになりそうな現状は、悩ましいものである。

(成蹊大学)

2024年 アメリカ学会 第58回年次大会 プログラム

1. 開催日 2024年6月1日(土)・6月2日(日)
2. 会場 早稲田大学早稲田キャンパス国際会議場
大会企画委員長 下斗米 秀之 h_shimotomai アットマーク meiji.ac.jp
会場責任者 麻生 享志 asoes アットマーク waseda.jp
3. プログラム (報告要旨は別に「報告要旨集」に掲載されます。時間は全て日本標準時です)
* 本大会は早稲田大学大学院国際コミュニケーション研究科との共催になります。
* タイトルの日英別は、発言言語によるものです。
* 今大会の分科会はオンラインで開催されます。各分科会の開催時間等は別途お知らせいたします。

第1日 2024年6月1日(土)

午前の部

自由論題報告 10:00~12:00

【Session A 人種をめぐる政治と戦争 Politics and Wars over Race】

国際会議場3階第一会議室

1. 司会・討論者：佐藤円 (大妻女子大学)
報告者：塚田浩幸 (亜細亜大学・非)
「アーリー・アメリカン・ホロコーストへのアクセラとブレーキ——#VastEarlyAmerica 対立空間におけるピークウォート戦争」
2. 司会・討論者：一政史織 (中央大学)
報告者：増田直子 (津田塾大学)
「アメリカ・フレンズ奉仕団が日系アメリカ人再定住政策に及ぼした影響——戦時転住局との関係を中心に」
3. 司会・討論者：黒崎真 (神田外語大学)
報告者：小林勇人 (日本福祉大学)
「公民権運動の転換期における福祉政策——チャールズ・エヴァーズの戦略をもとに」

【Session B 身体性とウィルダネスの再想 Reimagining the Corporeality and Wilderness】

国際会議場3階第二会議室

4. 司会：中垣恒太郎 (専修大学)
討論者：山口和彦 (上智大学) * 司会者によるコメント原稿代読
報告者：森兼寛登 (広島大学・院)
「Cormac McCarthy の The Border Trilogy における手の表象と宗教性」
5. 司会・討論者：Yuki Maruyama 丸山雄生 (Tokai University 東海大学)
報告者：Azumi Sakamoto 阪本杏実 (Graduate Student, Waseda University 早稲田大学・院)
「African “Killer” Bees in 1970s Horror Films: An Interplay of Scientific, Social, and Cultural Discourse」
6. 司会・討論者：Keita Hatooka 波戸岡景太 (Meiji University 明治大学)
報告者：Kerong Chen (Graduate Student, Waseda University 早稲田大学・院)
「Cold Mountain, Groovin’: An Imagined Wilderness as the Counter-Rhythm to the Fusion of a Beatnik “Americanness”」

【Session C 文学と映画におけるアイデンティティと抵抗 Identity and Resistance in Literature and Film】

国際会議場3階第三会議室

7. 司会・討論者：Michael Larson (Keio University 慶応義塾大学)
報告者：Jiro Morishita 森下二郎 (National Institute of Technology, Kagawa College 香川高等専門学校)
「Apologetic Authority and Victorious Victimhood: The Cold War, Postmodernism, and Post-Feminism in Donald Barthelme’s *The Dead Father* (1975)」
8. 司会・討論者：Yukihiro Tsukada 塚田幸光 (Kwansei Gakuin University 関西学院大学)
報告者：Kenta Kato 加藤健太 (Graduate Student, Waseda University 早稲田大学・院)
「The Temporality of Male Melodrama in Clint Eastwood Films」
9. 司会・討論者：Yuko Miyamoto 宮本裕子 (Rikkyo University 立教大学)
報告者：Ka Sin LEE (Graduate Student, Waseda University 早稲田大学・院)
「Deglamorizing the Star in Same-Sex Romance: The Subjectification of the Star-Embodied Lesbian Body in *Disobedience* (2017)」

休憩 12:00~12:30

理事・評議員会 11:30~12:00 国際会議場1階井深ホール

授賞式 12:00~12:30 国際会議場1階井深ホール

午後の部 国際会議場1階井深ホール

ASAK 会長講演 12:30~13:00

司会：前嶋和弘（上智大学）

報告者：

Jee Hyun An (Seoul National University)

“Toni Morrison’s *Home* and the Cold War: Reconfiguring American Studies”

シンポジウム「統合と分断のアメリカ——大陸会議開催 250 年」 13:00～16:00

司会：矢島宏紀（昭和女子大学）・菅（七戸）美弥（東京学芸大学）

討論者：小倉いずみ（大東文化大学・名）・岡山裕（慶応義塾大学）

報告者：

森丈夫（福岡大学）

「イロコイ連合と「隣人たち」の 200 年——同盟・支配・分裂の 17-18 世紀大陸史」

石川敬史（帝京大学）

「革命機関としての邦議会と帝国としての連邦政府」

鈴木透（慶応義塾大学）

「物語が作ったアメリカ——危機と統合の文化史」

松本俊太（名城大学）

「三権の筆頭格としての連邦議会とその地位の低下」

第 2 日 2024 年 6 月 2 日(日)

午前の部

部会・ワークショップ 10:00～12:30

【ワークショップ A OAH-JAAS Workshop: Human Rights, Secrecy, and Cultural Diplomacy in Twentieth-Century America】国際会議場 3 階第一会議室

Chair: Itsuki Kurashina 倉科一希（Doshisha University 同志社大学）

Speakers:

Sam Lebovic (OAH, George Mason University)

“The Japanese Spy Scare and the Origins of American Secrecy”

Hideaki Kami 上英明（The University of Tokyo 東京大学）

“Havana’s USA: Sister Cities, Sports, and the Making of People-to-People Communication”

Carl Bon Tempo (OAH, SUNY at Albany)

“Human Rights and Free Market, 1975-1990: The View from Outside the Ivory Tower”

【部会 A 西部フロンティアをめぐるアメリカ大衆文化の想像力・再考】国際会議場 3 階第二会議室

司会：石原剛（東京大学）

討論者：ウェルズ恵子（立命館大学）

報告者：

井上博之（東京大学）

「『荒馬と女』におけるマリリン・モンローと西部の変容」

関根路代（日本工業大学）

「ホイットマンの「西部」——ジオポエティックスの観点から」

永富真梨（関西大学）

「カントリー音楽のクィアナ西部——ジェンダー/セクシュアリティと階級の交差する場所」

鈴木紀子（大妻女子大学）

「トランスナショナル・ウェスト——戦後日本の西部劇漫画における『西部』の受容とアダプテーション」

【部会 B Transcultural Dialogues in the Age of War & Pandemic】国際会議場 3 階第三会議室

（本部会は早稲田大学大学院国際コミュニケーション研究科発案の企画です。）

Chair: Takashi Aso 麻生享志（Waseda University 早稲田大学）

Discussant: Mike Fu（Waseda University 早稲田大学）

Speakers:

Mitsuhiro Yoshimoto 吉本光宏（Waseda University 早稲田大学）

“From *Shin Godzilla* to *Godzilla Minus One*”

Takashi Aso 麻生享志（Waseda University 早稲田大学）

“The Formation of Transpacific Vietnamese American Studies in the early 21st Century”

Porrane Singpliam (Chulalongkorn University)

“Raewyn Connell and the Performative Gender of Governance: Crony Patriarchy as Mediated by Popular Press”

Rei Magosaki 孫崎玲（Chapman University）

“Native American Presence in Japanese American Wartime Incarceration”

休憩

12:30～13:00

新理事会

12:30～13:00 国際会議場 1 階井深ホール

総会

13:00～13:30 国際会議場 1 階井深ホール

午後の部

部会・ワークショップ 13:40~16:40

【ワークショップ B ASA-JAAS Workshop: Climate Change, "Natural" Disaster, and Global Unrest】

国際会議場 3 階第一会議室

Chair: Kyoko Hearn Shoji ハーン小路恭子 (Senshu University 専修大学)

Discussant: Kei Hinohara 日野原慶 (Daito Bunka University 大東文化大学)

Speakers:

Julie Sze (ASA, University of California at Davis)

"Stories from the Frontline: Resistance, Reparations and Restorative Climate Justice"

Iyko Day (ASA, Mount Holyoke College)

"Nuclear Power and the Waste Theory of Value"

Kyoko Matsunaga 松永京子 (Hiroshima University 広島大学)

"Aridity, Nuclearism, and Literary Imagination of the "Desert" Southwest"

【部会 C 越境するマイノリティ研究】国際会議場 3 階第二会議室

司会: 佐原彩子 (共立女子大学)

討論者: 石山徳子 (明治大学)

報告者:

徳永悠 (京都大学)

「在米日系人の経験と環太平洋史研究」

李里花 (中央大学)

「在日コリアン研究からみるマイノリティ研究の現在——関係論的アプローチへのシフト」

松坂裕晃 (立命館大学)

「帝国を伝う詩: クロード・マッケイ「もし死なねばならぬなら」の朝鮮語訳と日本語訳」

【部会 D アメリカの国際関係史・外交史と民間団体】国際会議場 3 階第三会議室

司会: 三牧聖子 (同志社大学)

討論者: 小野沢透 (京都大学)

報告者:

佐藤真千子 (静岡県立大学)

「アメリカの国際 NGO は人権アドボカシーと外交政策をどう変えてきたか」

奥田俊介 (名古屋外国語大学)

「民間財団は『独立した』アクターか? ——1960 年代のフォード財団とアメリカ政府の関係性を例に」

宮田智之 (帝京大学)

「トランプ現象と保守系シンクタンクの変容」

4. 注意事項

- 1) 今大会は、分科会 (オンライン開催) を除き対面のみでの開催となります。オンラインでの配信はありません。ご注意ください。
- 2) 大会参加登録は、学会ウェブサイトの大会参加登録ページ上で、必ず 2024 年 5 月 26 日 (日) までにお願いたします。参加登録ページの URL は、アメリカ学会会員用メーリングリストにて配信いたします。会員の方でメールが届かなかった方は、「迷惑メール (junk mail)」フォルダもご確認ください。見つからなかった場合は、お手数をおかけして大変申し訳ございませんが、学会 HP の「お問い合わせ・応募フォーム」の年次大会企画委員会までご連絡ください。
- 3) 大会期間中、キャンパス内の食堂は使用できません。昼食については、各自ご用意ください。
- 4) 今大会は懇親会を開催いたしませんのでご了承ください。

5. 会場案内

受付	国際会議場 1 階ロビー
大会本部・役員控室	国際会議場 3 階市島会議室
会員控室・外国ゲスト控室	国際会議場 4 階共同研究室 1~3
賛助会員 (書店) ブース	国際会議場 1 階ロビー

〈早稲田大学早稲田キャンパスへのアクセス〉

- ・ JR 山手線高田馬場駅から徒歩 20 分
- ・ 西武鉄道西武新宿線高田馬場駅から徒歩 20 分
- ・ 東京メトロ東西線早稲田駅から徒歩 5 分
- ・ 東京メトロ副都心線西早稲田駅から徒歩 17 分
- ・ 都バス学 02 (学バス) 高田馬場駅-早大正門 西早稲田バス停下車 徒歩 3 分
- ・ 東京さくらトラム (都電荒川線) 早稲田駅から徒歩 5 分

国際会議場は早稲田キャンパス「北門」の向い側にある中央図書館の建物の1階にあります。中央図書館を目印にお越しください。



第58回年次大会分科会のご案内

- * 本大会の分科会はすべてオンラインでの開催となります。
- * 未定のスケジュール等については後日改めて通知いたします。

1. 「アメリカ政治」

責任者：松井孝太（杏林大学） kmatsui アットマーク ks.kyorin-u.ac.jp

報告1：松本明日香（東北大学）「表現の自由とフェイクニュースの行方——2024年米大統領予備選挙におけるSNS論争」

報告2：宇野正祥（東京大学・院）「アメリカ保守主義政治運動における政策的立場の断続的平衡」

開催日時／形式：5月31日（金）19：00～20：40／ZOOMで開催（URL等は後日連絡）

本年度のアメリカ政治分科会は、2名の会員より、アメリカ政治の各分野における最新の研究成果を報告いただく。松本会員は、アメリカのメディア選挙におけるフェイクニュース前史と理論的背景を整理した上で、フェイクニュースがより悪化するといわれる2023年影の予備選挙から2024年予備選挙における相反する「表現の自由」と「フェイクニュース」の様態を、①SNS凍結・解禁、②予備選挙討論会不参加、③TikTok禁止法案とZ世代などの観点から論じる。宇野会員は、アメリカの保守主義政治運動のK-12（初等・中等）教育領域における政策的立場の変遷を事例とし、独任制行政長官（大統領／知事）の予備選挙に着目して、政治的価値に基づく政策革新・制度変化を志向するイデオロギーの政治運動におけるイデオロギーと政策的立場の対応関係の形成と変化のモデルを提示する。

2. 「アメリカ国際関係史」

責任者：吉留公太（神奈川大学） ft101846cs アットマーク jindai.jp

報告者：青野利彦（一橋大学）「『冷戦史』の執筆意図と主要論点」

討論者：菅英輝（大阪大学、九州大学）

開催日時／形式：6月7日（金）18：00～／ZOOMで開催（URL等は後日連絡）

青野会員の著書『冷戦史』（上、下、中央公論新社、2023年）は、アジアと日本の動向にも目配りしつつ近年の研究成果を踏まえた冷戦の通史を提示している。執筆意図と主要な論旨を知るとともに、討論者をはじめとして分科会参加者が本書を批評することで冷戦史研究をさらに発展させるための手がかりを得る機会としたい。

3. 「日米関係」

本年度休会

4. 「経済・経済史」

責任者：手塚沙織（南山大学） satezuka アットマーク nanzan-u.ac.jp

報告者：加藤一誠（慶応義塾大学）「“The Big Sort”と交通インフラの近隣効果」

開催日時／形式：5月31日（金）18：00～／ZOOMで開催（URL等は後日連絡）

今日、交通インフラの維持管理や更新とその財源調達日は日米共通の課題となっている。本報告の問題意識の端緒は、州によって道路状態に差がある理由は何か、ということにある。報告者のパネル分析によれば、州別の道路状態に、連邦政府の投資順位のガイドラインや隣接州の政策が影響を与えている。つまり、ある州の道路状態が良ければ、隣接州の道路も改善される。ここに、住民の投票行動がもたらす影響が示唆される。

また、共和党支持者と民主党支持者の交通への選好は分かれ、たとえば、共和党支持者は道路整備を選ぶ。こう

して、ビショップの観察した移住による同一政党支持のコミュニティ形成は、交通政策にも色濃く反映される。本報告では、地理的近接性が交通政策に及ぼす影響を議論したいと考えている。

5. 「アジア系アメリカ研究」

責任者：和泉真澄（同志社大学）mizumi アットマーク mail.doshisha.ac.jp

報告者：Emily Anderson エミリー・アンダーソン（Japanese American National Museum 全米日系人博物館）「食文化」を通じて新たに探る日系文化——全米日系人博物館の最新プロジェクトの紹介「Introducing JANM's New Multi-Year Project: New Approaches to Exploring Japanese American Culture through Food」

開催日時／形式：5月31日（金）18：00～19：30／ZOOMで開催（URL等は後日連絡）

人間にとって食べ物の重要性は言うまでもない。栄養の元以上に、食事は文化、アイデンティティー、歴史、思い出など、さまざまな意味が重なったものでもある。特に今のアメリカでは、日本食・和食の世界的人気に伴い日系アメリカ人の食文化も注目されるようになっている。日系アメリカ人と食べ物との関係は単に日本を離れた日本食の話ではない。移民としての経験、移住前と後の環境、子孫に伝わった食べ物にまつわる「物語」・神話、食べ物の違いや珍しさから生じた差別や偏見など、食べる物を通していろいろなものが見えてくる。本発表では、まだ史料集めが始まったばかりのプロジェクト、2027年に全米日系人博物館で開催予定の展示の現時点の計画などを紹介する。

6. 「アメリカ女性史・ジェンダー研究」

責任者：鈴木周太郎（鶴見大学）suzuki-s アットマーク tsurumi-u.ac.jp

報告者：並河葉子（神戸市外国語大学）、貴堂嘉之（一橋大学）、鈴木周太郎（鶴見大学）「フィリッパ・レヴァイン『イギリス帝国史：移民・ジェンダー・植民地へのまなざしから』（並河葉子、森本真美、水谷智訳、昭和堂、2021年）合評会」

開催日時／形式：5月31日（金）19：30～21：00／ZOOMで開催（URL等は後日連絡）

イギリス近代史研究の並河葉子氏をお招きし、フィリッパ・レヴァイン『イギリス帝国史：移民・ジェンダー・植民地へのまなざしから』についての合評会をおこなう。イギリス帝国の興亡について、奴隷制／奴隷貿易やジェンダーとセクシュアリティ、あるいは植民地経営とそれへの抵抗といった観点に着目し、社会的・文化的側面を含め詳細に検討された同書について、まずは訳者の一人である並河氏より紹介していただく。その後、貴堂嘉之会員と鈴木周太郎会員より書評コメントを発表し、並河氏による応答後、フロアと質疑応答およびディスカッションをおこなう。女性史、ジェンダー史、奴隷制史、帝国主義、グローバル・ヒストリーなど、広範な関心を持つ会員による活発な議論を期待したい。

7. 「アメリカ先住民研究」

責任者：佐藤円（大妻女子大学）mdsato アットマーク otsuma.ac.jp

報告者：小澤奈美恵（立正大学）「ピークオット族の作家ウィリアム・エイプスと19世紀の権利拡張運動」

開催日時／形式：5月31日（金）19：00～20：30／ZOOMで開催（URL等は後日連絡）

19世紀にピークオット族のメソジスト派の牧師として著作活動を行ったウィリアム・エイプス（1798-1839）の紹介を行い、同時代の権利拡張運動との関連性を考察する。エイプスは自伝や説教、マシュビー・ワンパノアグ族の諸権利獲得運動の記録、フィリッパ王戦争で滅ばされたワンパノアグ族の首長フィリッパ王メタカム再解釈の書などを残した。こうしたエイプスの業績を、1830年代のチェロキー族の強制移住反対運動や奴隷制廃止運動の隆盛との関係性の中で捉えなおしていく。これらの運動には、人種・ジェンダーの多様性がみられ、白人知識人だけでなく、先住民、アフリカ系、混血の人々など多種多様な人々が関わり、女性も発言権を拡張しようとしていた。征服された先住民が、支配者の言語である英語やキリスト教、啓蒙主義思想を武器として、逆に先住民の当然の権利を明らかにしていく手法は、多民族国家アメリカを形成する源流と言える。

8. 「初期アメリカ」

責任者：鰐淵秀一（明治大学）swanibuchi アットマーク meiji.ac.jp

報告者：佐藤清子（東京大学）「アメリカはキリスト教国家として建国されたのか——キリスト教右派の歴史認識をめぐって」

討論者：佐々木弘通（東北大学）、森本あんり（東京女子大学）

開催日時／形式：6月8日（土）14：00～15：30／ZOOMで開催（URL等は後日連絡）

今年度の初期アメリカ分科会は、佐藤清子氏をゲストに迎え、現代のキリスト教右派に共有される「キリスト教国論」の検討を通じて、ジェファソンに代表される建国父祖の「当初の意図」をめぐる合衆国の歴史認識問題についてお話しいただく。建国父祖が合衆国をキリスト教国 Christian nation として制度設計を行ったという理解に基づくキリスト教国論は、合衆国憲法修正第1条で定められた政教分離の解釈に変更を迫る可能性を持つ議論であり、歴史認識問題にとどまらず、合衆国の政教関係そのものに大きな影響を及ぼす危険性を持つ。まず佐藤氏に、2023年に下院議長に就任したマイク・ジョンソンの発言や宗教保守派による独自の歴史教科書などの検討から、その内容と影響力についてご紹介いただき、次いで佐々木弘通氏と森本あんり氏にそれぞれ憲法学と宗教史の立場からコメントをいただく。歴史認識問題を通して、初期アメリカが現代合衆国における「過ぎ去らぬ過去」として持つ意味を参加者とともに考える会としたい。

9. 「文化・芸術史」

本年度休会

10. 「アメリカ社会と人種」

責任者：山本航平（就実大学）duchpb42 アットマーク gmail.com

報告者：児玉真希（獨協大学）「アンテベラム期のニューオーリンズにおける「見捨てられた」と呼ばれた女性たち——新聞記事から見る「例外主義」と人種間関係」

開催日時／形式：5月27日（月）19：00～21：00／ZOOMで開催（URL等は後日連絡）

本報告は、アンテベラム期に奴隷都市として繁栄したニューオーリンズにおける人種関係を「見捨てられた」女性たちの事例から照射し、「ニューオーリンズ例外主義」を再検討する。19世紀に入ると多様な人がニューオーリンズに定住し、またそれ以上の人が行き交うミシシッピ川とカリブ海を結ぶ海港都市へと発展した。フランス系やクレオール、新たに移住したドイツ、アイルランド系の人々が住み、黒人グループは奴隷だけではなく自由黒人、または混血の人も多くいた。さらに、ハイチ革命後に流入した移民なども加わり、この多言語で複雑な人種関係こそ、ニューオーリンズは他とは異なるという「例外主義」の言説を作り出してきた。本報告では、この「例外主義」の意味を「見捨てられた」女性たちに関する新聞記事から、人種だけではなくジェンダー関係からその意味を考察する。その作業を通じて、人種間関係の線引きを不明瞭にする彼女たちの存在が、ニューオーリンズを「例外」にしていることを明らかにする。

2024年プロセミナー開催のご案内

今年のプロセミナーは京都で対面開催いたします。アメリカ学会会員以外にも開かれておりますので、お問い合わせの上どうぞふるってご参加ください。

会場：京都大学

日時：6月5日(水) 10時～17時（時間は変更の可能性があります）

報告者：

有馬三冬（立教大学・院）

“Powerless Words and Fragile Fictions in Melville’s *Pierre*”

福西恵子（立命館大学・非常勤）

“Hawaii as an American State: Photographic Representations of Hawaiians at the Turn of the Twentieth Century”

加藤寿昂（京都大学・院）

“‘Exhibit [John] Glenn Like a Trained Seal’: US Public Diplomacy for Japan through the Mercury Project”

菊本雅人（京都大学・院）

“How has ‘Space Junk’ Become an Environmental Issue? A Focus on the Debate in the 1960s-1970s”

北田依利（法政大学他・非常勤）

“Japanese-Filipino Families in the U.S. Colonial Philippines”

Midori Komatsu Hidaka（同志社大学・院）

“Shades of Whiteness, Perception of Otherness: Locating the Ethnic Japanese in the Dominican Pigmentocracy”

宮本舞羅（津田塾大学・院）

“American Cross-dressing Actresses and Their Fans in the 19th and 20th Centuries”

竹野貴子（国会図書館他・非常勤）

“Disparities or Escalation of Domestic Politics?: Climate Change Politics in the U.S. and the Regional Governments’ Involvement in the International Society”

コメンテーター：

Iyko Day (ASA, Mount Holyoke College, Department of English)

Julie Sze (ASA, University of California at Davis, Department of American Studies)

Carl Bon Tempo (OAH, SUNY at Albany, Department of History)

Sam Lebovic (OAH, George Mason University, Department of History and Art History)

会場・プログラム詳細については、5月に学会MLでご案内いたします。

国際委員会

アメリカ学会海外渡航奨励金

— 国外の学会やシンポジウムで発表する方を対象とする助成制度のご案内 —

このたびアメリカ学会では、国外での学会やシンポジウムにて発表する方を対象に、以下の要領で渡航奨励金を支給することになりました。本制度による給付を希望する方は積極的にご応募ください。なお、今回（前期）の応募対象は、2024年8月～2025年2月に開催される学会です。2025年3月～7月開催の学会については、後期（12月募集）の対象となります。

1. 応募資格：

①アメリカ学会の会員であること。年会費の滞納がないこと。

* 応募時にアメリカ学会への入会手続中である場合はその旨明示すること。

②国際学会やシンポジウムでの発表時に、日本に在住し、日本からの旅費を要すること。

③発表内容がアメリカ研究に関するものであること。

④大学院生等の若手研究者を優先的に検討し、そのほか、助成の必要性、発表の内容を総合的に判断する。

2. 審査基準：

①大学院生等の若手研究者を優先する。大学院生については発表をしない場合も応募可能。

② American Studies Association, American Studies Association of Korea, Organization of American Historians のいずれかの年次大会で発表する方を優先するが、これら以外の国際学会やシンポジウムで発表する場合も応募できる。

- ③他組織からの援助のないものを原則として優先する。
- ④そのほか、助成の必要性、発表の内容を総合的に判断する。

3. 応募方法、結果発表、発表後の提出書類

- ①次の書類を6月16日から30日の期間に、5つ以内の添付ファイル（WordまたはPDF）にまとめて、学会HP（<https://www.jaas.gr.jp>）右上に表示されている「お問い合わせ・応募」ボタンから、宛先タブで「国際委員会（学会参加旅費補助・プロセミナー報告応募など）」を選択し、送付すること。「お問い合わせ内容」には「JAAS 海外渡航奨励金応募」と記載すること。
 - (1) 履歴書
 - (2) 業績書
 - (3) 発表が受け入れられたことを証明する文書（電子メール可）
 - (4) 発表のタイトルと要旨（英語で250-300語程度とする）
 - (5) (ASA, ASAK, OAH 以外での発表の場合のみ) 当該国際学会やシンポジウムに関する情報（目的、歴史、規模等、字数は指定しないが、簡潔で正確であること）および開催期間
 - (6) 理由書（奨励金を必要とする理由。字数は指定しないが、簡潔であること。他組織からの援助のないものを原則として優先するので、申請時にほかの組織による援助を申請中か、あるいは援助を受けることが決定した者は、その旨明記すること。ほかの組織による援助のなかには、所属機関の研究費を充当する予定も含む。なお、旅費・宿泊費（実費）の不足部分に限り、他の補助金との併用が認められる。）
 - (7) 旅程表（日本出国から帰国まで順を追って記載すること。旅程が応募時に確定していない場合は、仮日程で構わない。応募後に旅程変更を行う場合は速やかに報告すること。）
- ②審査結果は、7月中に応募者に通知し、学会ウェブサイトで公表する。
- ③発表終了後、2週間以内に報告書（邦語1200字程度あるいは英語500語程度とする）および領収書の原本（旅費・宿泊費）を提出すること。報告書は、学会ウェブサイトに1年間掲載する。

4. 支給額

アジア圏の場合は一人8万円、アジア圏外の場合は一人18万円を原則とする。

* 本奨励金についての問い合わせは、学会HP（<https://www.jaas.gr.jp>）右上に表示されている「お問い合わせ・応募」ボタンからお寄せください。お問い合わせフォームの「宛先」タブで「国際委員会」を選択し、「お問い合わせ内容」には「JAAS 海外渡航奨励金」と記載してください。

国際委員会

日米友好基金による旅費・滞在費補助金の受給者について/2023年ASA大会

2023年11月2日から5日まで、カナダのモントリオールにおいて開催された American Studies Association (ASA) 年次大会への旅費・滞在費補助金の受給者として以下の5名が選ばれました。おめでとうございます。

阿部啓会員（アラバマ大学博士課程）、馬場悠会員（ハワイ大学マノア校博士課程）、芳賀太弦会員（アラバマ大学博士課程）、木村智会員（ハーバード大学博士課程）、尾崎永奈会員（ボストン大学博士課程）

国際委員会

American Studies Association 派遣来日研究者のお知らせ

2024年のアメリカ学会第58回年次大会およびプロセミナーへの派遣研究者が次の2名に決まりました。

Iyko Day (Mount Holyoke College)

専門領域：アジア系アメリカ人研究、批判的人種理論、マルクス主義理論、人種資本主義、セトラー・コロニアリズム、クイア理論

Julie Sze (University of California at Davis)

専門領域：環境学、都市開発研究、エスニック・スタディーズ

国際委員会

Organization of American Historians 派遣来日研究者のお知らせ

2024年度のOAH/JAAS Short Residency Programによる派遣研究者が次の2名に決まりました。このプログラムはアメリカ史を中心に、日本の大学院生、学部学生の指導と研究者の相互交流を目的とするもので、研究者は各大学に約2週間滞在します。研究者の専門領域、受け入れ校と担当者、滞在期間は以下の通りです。

Carl Bon Tempo (SUNY at Albany)

専門領域：移民史、難民・人権問題、アメリカ政治
受け入れ校・担当者：共立女子大学・佐原彩子会員
滞在期間：5月24日から6月8日まで

Sam Lebovic (George Mason University)

専門領域：冷戦史，安全保障，メディア研究，グローバル文化史
受け入れ校・担当者：京都外国語大学・佐々木豊会員
滞在期間：5月24日から6月11日まで

国際委員会

American Studies Association of Korea 派遣来日研究者のお知らせ

2024年のアメリカ学会第58回年次大会に参加する派遣研究者が次の1名に決まりました。

Jee Hyun An (Seoul National University)

専門領域：アフリカ系アメリカ文学，初期アメリカ文学・文化，フェミニズム理論，カルチュラル・スタディーズ
国際委員会

『アメリカ研究』第59号「特集論文」募集のお知らせ

『アメリカ研究』第59号の特集テーマは、「アメリカとアジア 2.0」です。趣意は以下の通りです。

第30号(1996年)で「アメリカとアジア」を特集して以降、アメリカもアジアも、そしてその関係も大きく変化してきた。2000年代以降の中国の台頭はめざましく、とりわけ2012年秋に習近平政権が登場すると、南シナ海における実力による現状変更の動きを強め、一帯一路構想、アジアインフラ投資銀行を設立するなど現行国際秩序に挑戦するかのような様相を呈している。オバマ政権はアメリカを「太平洋国家」と位置づけ、東アジア、特に東南アジア諸国における多国間対話へのコミットメントを高めた。そして、中国に対しては自国の地位に全面的に挑戦する中国という認識が定着し、米中の競争関係は激化した。中国の要求は現行国際秩序の破壊ではなく、その枠内での修正であると見られているが、それは西側の既得権益、とりわけ米国のそれを損なう側面を持つ。

文学・文化の領域において、これまで多くのアジア系アメリカ作家や芸術家が論じられてきたが、中国の台頭が進む現代、アジアとアメリカの文化的力学には以前と異なる点もあるだろう。中国以外にも、たとえばインドやインドネシアなどの、いわゆるグローバルサウスと呼ばれるアジア地域の台頭は、アジア系アメリカ文学・文化の表象に何らかの変化をもたらしているのかもしれない。また、アジアとアメリカについて考える際、アメリカと敵対/同盟する国家間の関係性だけでなく、日本でいえば、沖縄、広島、長崎のように、政治に翻弄されてきた地域の歴史や文化を改めて見直すことも必要であろう。アジアでは不可視な存在をアメリカとの関係を介して可視化すること、あるいは忘却の彼方に葬り去られた出来事やテキストを改めて掘り起こす作業は、とすれば過去が軽視される新自由主義の時代において、重要な営みのように思える。

米国内ではブラック・ライブズ・マターが注目を浴びる一方、パンデミック下でのアジア系への差別が顕在化している。米国社会のマイノリティであると同時にセトラーでもあるアジア系の立ち位置はアフーマティブ・アクションにおいても独特なものとなっている。そこで次号の特集テーマを「アメリカとアジア 2.0」とし、上記のように更新されたアメリカとアジアの関係を意識した論考を募集する。経済、歴史、法律、政治外交、文化、文学などの幅広い分野からの積極的な投稿を期待したい。

「特集論文」に応募希望の会員は、2024年6月末日までに、氏名・所属・論文題目および構想・資料などの説明(400字程度)を学会ホームページの「お問い合わせ・応募」フォームより年報編集委員会宛にお申し込み下さい。その際、上記フォームの「お問い合わせ内容」欄に「『アメリカ研究』特集応募」と明記してください。

執筆要項は学会ウェブサイト参照のこと。

<https://www.jaas.gr.jp/the-american-review/writing-guidelines.html>

原稿締め切りは2024年8月31日(土)とします。

年報編集委員会

『アメリカ研究』第59号「自由投稿論文」募集のお知らせ

学会機関誌『アメリカ研究』(年報)は2025年3月に第59号を刊行する予定です。会員諸氏の積極的な投稿をお待ちしております。

1. 内 容 アメリカ研究に関する未発表論文。前年度『アメリカ研究』もしくは『英文ジャーナル』に論文が掲載された方は、本年度の投稿をご遠慮ください。また、同じ年度に、あるいは年度をまたいで『アメリカ研究』と『英文ジャーナル』の双方に投稿することはできません。これはなるべく多くの会員に発表の機会を提供するためです。

2. 枚 数 論文は33字×34行のレイアウトで19ページ以内(註を含む)。

執筆要項は学会ホームページを参照のこと。

<https://www.jaas.gr.jp/the-american-review/writing-guidelines.html>

3. 原稿締め切り 2024年8月31日(土)

4. 提 出 投稿希望者は2024年6月末日までに、学会ホームページの「お問い合わせ・応募」フォームより年報編集委員会宛に「論文題目」をお送りください。論文原稿は電子ファイルによる提出となります。

年報編集委員会

大橋陽・中本悟 編著

『現代アメリカ経済論

——新しい独占のひろがり』

(日本評論社, 2023年, 2,860円)

新自由主義が浸透するアメリカにおける「新しい独占」の解明に挑戦したのが、本書である。序章「独占化の強まりと政治権力」で中本悟は、「協業禁止契約」の低所得層への拡大など「レントを求める独占企業の政治権力」の問題点を追求する。続く第Ⅰ部第1章(森原康仁)は、ネットワーク外部性を梃子とするGAFANAなど、プラットフォーム・ビジネスによる独占の特徴を明らかにする。第2章(大橋陽)は、巨大資産運用会社が水平的株式所有により競争を減退させる新しい独占の政治的影響力の問題を提起し、第3章(名和洋人)は、「パッカーと生産農家との垂直的統合」を家禽・鶏卵や豚を事例に、流通部門による生産農家支配を、そして第4章(藤田怜史)は、冷戦終結後の軍産複合体が、大砲よりも「バタを優先させながら世界で圧倒的な軍事的優越を維持した」と指摘する。また第5章(浅野敬一)は、チェーン・ストアの急成長過程をたどりつつ、ウォルマートやeコマースが「多面的で価格を引き下げる」新しい独占の一面を描きだしている。

第Ⅱ部第6章(田村太一)は、アメリカ多国籍企業が編成するグローバル・バリュー・チェーンに焦点を当て、生産委託の管理を通じた独占利潤の問題を考察する。第7章(増田正人)は、国民通貨ドルの国際通貨としての独占的地位が、ロシアなど敵対国に対する金融制裁の裏付けとなっている点を浮き彫りにする。下斗米秀之は、第8章で中南米諸国からの「非正規」移民の流入がアメリカ多国籍企業の経済開発によって生み出されたことを指摘し、第9章ではインド移民に着目し、アメリカへの頭脳流出だけでなく、育成された高度人材が母国での経済開発に寄与する「頭脳循環」の側面に焦点を当てる。

第Ⅲ部第10章(本田浩那)は、コロナ禍後のインフレ問題に着目し、国際海運や陸上輸送における寡占化がサプライチェーンに構造的な目詰まりを起こした結果であると指摘する。第11章(大橋陽)は、リーマン・ショックを経て創設された消費者金融保護局のタスクフォース報告書の検討を通して、貧困や差別に苦しむ人々への金融サービスを図る「金融包摂」の思想が、業界団体による「政府機関の乗っ取り」に直面する姿を明らかにする。第12章(安岡邦浩)は、Amazonを事例にプラットフォーム・ビジネスによる独占禁止政策の難しさを、そして最終の第13章(森原康仁)は、巨大プラットフォームがウェブ上のコミュニケーションを無償で取得することのもたらす社会的影響を掘り下げている。

須藤功(明治大学)

巽孝之監修／大串尚代・佐藤光重・常山菜穂子
編著

『アメリカ文学と大統領

——文学史と文化史』

(南雲堂, 2023年, 6,380円)

本書は慶應義塾大学で長年教鞭を取った巽孝之の退職記念論文集であり、彼の薫陶を受けた者を中心に、新進気鋭の若手からベテランに至るまで豪華な執筆陣総勢26名による論文を収めている。本書の礎となっているのは『リンカーンの世紀』(2002; 増補新版2013)である。その書において、巽は米大統領を文学者として考察し、19世紀アメリカ文学と大統領の関係を広く論じている。『アメリカ文学と大統領』はそのアイデアをさらに拡大させ、執筆者らは米国における大統領と文学の、のびきならない関係を多面的、かつ重層的に照らし出している。四部構成となっており、第一部は独立革命から19世紀半ば、第二部は19世紀半ばから20世紀前半、第三部は20世紀前半から冷戦中期、第四部はそれ以降から現代を扱っている。

本書の最も魅力的な点は、なんとといってもアメリカ史全体を対象とする射程の長さだろう。いくら歴史が短いといっても、米国はすでに46名の大統領を輩出しており、その歴史を丸ごと一冊の本の中で扱う試みは知的で大胆な冒険である。収録論文の手法にはいくつかのパターンが観察できる。1) 大統領自身によるテキスト(回想録、演説やインタビュー、出演映画等)、2) 大統領が物語の題材になっている、あるいは言及されているテキスト、3) 大統領が直接的に描かれるわけではないが関連付けて読むことができるテキストの考察、これらの内のいずれか、あるいはいくつかの組み合わせが手法として採用されている。巽といえ、複数のテキストをジャンル横断的に比較しつつ論じることを得意としているが、彼の真骨頂は同時代に出版された複数のテキストの考察だけでなく、異なる時代を跨いで分析を行う点にもあると評者は理解している。例えば、20世紀のテキストに描かれる内容の予型を19世紀のテキストの中に見て、そこからアメリカ文学に通底する伝統を炙り出すのである。この意味で、特に富塚、白川、常山、奥田、山根、秋元の論文は縦の同時代的な視点だけでなく、横のクロノロジカルな歴史の流れも意識しつつ、異なる時代のテキストを縦横無尽に行き来して分析しており、巽から継承した手法を鮮やかに披露している。

アメリカの大統領史は白人男性がほぼ独占的に形成してきたナラティブである。この人種およびジェンダーの偏りを踏まえた上で、大和田、加藤、深瀬の論文は、女性や人種の少数派の作家による大統領への応答を扱っており、興味深い内容になっている(ただ、歴史的に周縁化されてきた「彼女ら・彼ら」自身の多様な声をさらに多く聞きたいと思う部分はあった。)全体として本書から得られる知的刺激は実に多く、アメリカ文学と大統領の密接でありながら、一辺倒ではない関わり方を一冊で存分に学ぶことができる良書となっている。

松田卓也(九州工業大学)

尾崎俊介 著

『14歳からの自己啓発』

(トランスビュー, 2023年, 2,420円)

『人は話し方が9割』、『やる気に頼らず(すぐやる人)になる37のコツ』、『〈いつも誰かに振り回される〉が一瞬で変わる方法』—もはや律儀に「軽蔑」を覚えることさえ忘れてしまうくらい、電車に乗るたびに必ず目に入る自己啓発本の車内広告の数々。ここ日本においては「ほとんど唯一、売れまくっている本」のジャンルであることは間違いない。往々にしてヴィヴィッドな色づかい、やたらと発行部数実績を強調する丸みを帯びたフォント、妙に子どもっぽい人間や動物のフリー素材じみたイラスト、などなどで構成されるこれらの車内広告に対する関心が、本書『14歳からの自己啓発』を読み終えた後で変わるのもこれまた間違いない。

これから人生という迷宮に歩み入ろうとする中学二年生たちに、「役に立つ武器」となりうる知恵の集合体として、アメリカ産「JKB」(=自己啓発本、を著者はこう総称する)の教えを紹介するという体裁を本書は取っている。話し言葉で綴られたフレンドリーな文章、尽きることのない巧みな例え話、各章間にコーヒープレークという余談(すこぶる面白い!)が挟まれる構成といった点から、硬派な研究書とは美しく一線を画してはいるが、アメリカ、特に19世紀以降の文化風土のなかで育まれてきた「JKB」という特殊な「文芸ジャンル」の歴史を網羅的に記述する本書は、まぎれもない文学/文化研究の達成である。何と言っても「JKB」という大分類を、それぞれの章で主要著者と代表作を概括しながら、「自助努力系」(2章)「引き寄せ系」(3,4章)「人間関係系」(5章)「ACIM系」(7章、ヘレン・ジャックマン『奇跡のコース』の思想を下敷きにしたいわばインスパイア系?)というような小分類に展開する知的力業は見事である。著者がまとめる「インサイド・アウト」(まずは自分の内側を変えることで外の環境を変える)というアメリカにおける「JKB」の金科玉条にも、汎神論から(亜流の?)精神分析、果ては宇宙人による宣託まで、様々な変奏曲があることを教えられる。

幾多の「JKBライター」たちによる個性豊かな教説という図を紹介しながら、その発生の地としてアメリカの宗教観や知識史、およびアメリカ社会の変遷を確認していく歴史化の手続きも疎かにされていない。スウェーデンボルグ神学のアメリカ知識人への影響(1章)、大実業家からサラリーマンへというロールモデルの変化(5章)、東洋思想と「瞑想」の輸入(9章)などのトピックが、歴史的パースペクティブの下でそれぞれに各時代の「JKB」と結びつけられる。軽妙洒落でいながら大いに教育的でもあるのだ。

「自己」と「超越」—近年の言い方に倣えば「メンタルヘルス」と「スピリチュアリティ」—への気がかりが常に中心にあるアメリカの精神史を考える研究者にとっても、本書は得がたい「役に立つ武器」である。

齊藤弘平(青山学院大学)

小倉いずみ 著

『ラルフ・ウォルド・エマソンと奴隷制廃止主義』

(金星堂, 2023年, 6,600円)

全11章と関連資料から成る本書は、「1850年の妥協以降の奴隷制問題と連邦政治がどのようにエマソンの思想に変化を起こしたのかに重点を置く」(xxi)一冊だ。超絶主義者を非現実的な理想主義者とみなす通念の影響もあり、これまで十分に論じられてこなかった彼の後期思想と政治との関わりを探るため、著書はまずあえてアメリカ大陸発見以前にまで遡る。過去400年間の奴隷貿易の航海データが公開されたことに端を発する近年の『ウィリアム・アンド・メアリ・クォーター』誌の方向転換(xv)も踏まえつつ、第1章、第2章では大航海時代から建国期にかけての奴隷制の問題が論じられる。

続く第3章以降は、1830年代以降のエマソンと奴隷制反対、奴隷制廃止主義との関係を時系列に沿う形で詳細に跡づける。とりわけ、『後期講演集』(2001)および、2013年に完成した『新版全集』といった最新の資料に立脚しながら小倉は、それぞれの時代を画する重要事とエマソンや同時代人たちの応答を丁寧に併置してゆく。たとえば第4章は、ウェブスターやチャニングとのすれ違いについても周到に言及しつつ準備過程にも注目することで、講演「英国領西インド諸島の奴隷解放記念講演」(1844)こそが、エマソンを「優しい奴隷制反対論者」から一步踏み込んだ思考へと導く大きな転換点となったことを説得的に示している。また第7章では、1859年のハーバース・フェリー事件およびジョン・ブラウンに対するエマソンの言葉が、彼とともにブラウンを称賛するソローの関連講演における「果実」や「種子」をめぐる興味深い比喩や、ホーソンによるブラウン批判との対比にも注目しながら詳らかにされる。

数ある論点のなかでも本書の中核をなすと思われるのが、第8章全体が捧げられた思想家エマソンと政治家リンカーンの比較である。それは、二人の接近にこそ、思想と政治の分断を強調してきた過去のエマソン研究の傾向に介入する糸口が見出せるからだ。本書は二人の面会を詳細に振り返ることはもちろん、「国家分裂と南部同盟の独立に反対した」からこそ、北部のエマソンが西部のリンカーンを強力に支持したという背景を強調する(246)。「奴隷制反対と連邦維持」に立脚したリンカーンとの結びつきは、続く第9章で分析されるエマソンの講演「アメリカの文明」(1862)が、「リンカーンより半年以上早く奴隷解放を予見していた」事実とも共鳴する(264)。

この繋がりは、第10章で扱われる南北戦争に関するエマソンの詩、とりわけ「ボストン賛歌」(1863)の内容と最も印象深い形で響き合う。「ピューリタンからリンカーンに至る240年の歴史の中に黒人奴隷の位置を定め」、「予型」と「対型」から成るタイポロジーを描いた、本書全体の議論を包括するかのようこの詩こそ、「奴隷解放宣言によるアメリカの自由の実現が解放奴隷に委ねられたことを暗示」する(304)、後期エマソンにおける政治と思想の結合を示す象徴的なテキストに他ならない。

富塚亮平(神奈川大学)

竹沢泰子 著
『アメリカの人種主義——カテゴリー／アイデンティティの形成と転換』
(名古屋大学出版会, 2023年, 4,950円)

人種主義は米国社会の茨として領域分野を問わず突き刺さる問題だ。ゆえに本書は多くの研究者が手にするだろう。そして、すぐさま米国研究の「古典」になるだろう。本書の目的は明快だ。「人種主義がシステミックであることを一次史料や二次文献、オリジナルなデータから実証し、またマイノリティ化された人びとのアイデンティティの模索についてインタビューをもとに描き出す。それにより、カテゴリーとアイデンティティがいかに形成され転換・変容してきたのか、五つの視角（消費・学知・制度・経験・芸術）から立体的に描くことを試みる」と序章に宣言され、骨太に筆致が進んでいく。「消費」とは報道・商業媒体に浮上する人種表象の社会受容を論じる第1部を指し、「学知」は欧州と米国の人類学者たちの営為と社会言説を論じる第2部、「制度」は国勢調査と司法決定における人種の範疇化を論じる第3部、「経験」は日系移民の社会経験と自己表象を論じる第4部、「芸術」は米国社会でアイデンティティの象徴を問うアーティストたちと作品を読み解く第5部に対応している。この本文・注釈・図版あわせ500頁におよぶ大著は、全12章の議論にて人種主義の恣意性を問い続ける。語りの芯に揺らぎは皆無だが、トピックの多彩さと言及される領域は広大だ。カリカチュア、学会論争、頭蓋骨、分

類表、アート作品、核兵器……博識な著者の筆致に読み手は圧倒される。しかし情報量は多いが、平明かつ吟味された語彙によって論に淀みはなく、むしろ文量の厚みが問題の視野角と解像度を高めている。各章には同時代問題を意識しつつも、通時的観点を失わない優れた学術的空間感覚があり、さらに初学者への配慮も欠けることはない。この特徴ゆえに、本書は人種問題に関心を抱く学部生、学位論文執筆中の院生から他領域の研究者まで幅広い読者を取り繋ぐ結節点となるだろう。

また本書は、日本の研究者が米国に問う米国研究としても重要だ。米国社会の内部で人種主義が論じられるとき、しばしば包含領域に「黒」対「白」の二値化が生じる。そのときアジア系移民の経験は「ゼノフォビア」としてすり替えられてしまう。アジア系移民が米国社会で直面する経験も人種主義そのものと提示する本書は、米国研究の「本場」で蠢く〈人種主義視線の国内化〉を指摘し自省を促すだろう。

さて、緻密な論考とは一朝一夕に出来上がるものではないと改めて気付かされる。初出一覧を見ると、1980年代の修論研究を基礎にした第1章から直近の研究成果である終章まで、著者の歩んできたひと続きの道がみえる。本書を読み進める過程は、ひとりの真摯な研究者の刻んだ足跡と拓いた光景をたどる旅のようだ。そして「あとがき」を忘れずに読んでほしい。先輩研究者が等身大の目線で語りかける声が聞こえる。その言葉に救われる後輩たちは少なくないはず——わたしもそのひとりだ。
鈴木俊弘（新潟国際情報大学）

新入会員 (2023年12月3日現在)

木村智	ハーバード大学(院)	宗、思、史
尾崎永奈	ボストン大学(院)	史、文、化
レイヴンスクロフト・クレア (RAVENSROFT, Claire)	国際基督教大学	文、化、環
ノバク・クリスティナ (NOVAK, Kristina)	サンクトペテルブルク国立大学(院)	史、文、化
宇野正祥	東京大学(院)	政、外、思
荒木佑真	大阪大学(院)	政、人、教
岩田仲弘	東京新聞	政、外、人
エンハイヤル・ノミンエルデネ (ENKHBAYAR, Nomin-Erdene)	筑波大学(院)	化、衆
張汝楠 (ZHANG, Runan)	早稲田大学(院)	文
森兼寛登	広島大学(院)	文、化、宗
小林勇人	日本福祉大学	社、政、史
大坪哲也	西南学院大学	思、宗、政

(* 入会申し込み順。専門領域の略記については、PDF版会員名簿作成用アンケートおよび学会ホームページに記載されている新表記法による)

訃報

有賀夏紀元会長（埼玉大学名誉教授）が2024年3月7日にご逝去されました。日本におけるアメリカ社会史の第一人者でありジェンダー史の草分けとして大きな功績を残された有賀先生は、2008年6月から2年間にわたり会長を務められました。先生のアメリカ学会への長年のご貢献に感謝を申し上げるとともに、謹んでご冥福をお祈りいたします。

編集後記

カリフォルニアでのサバティカルを終えて帰国した。留学時代も含めると、これでアメリカには計7年住んだことになる（アトランタ6年＋パークレー1年）。大学では「アメリカとはどのような国か」を知ったような顔をして教えざるをえないわけだが、住めば住むほどにこの国がわからなくなる。リベラルな価値観で知られるパークレーの空気をたっぷり吸って帰国したら、今度はトランプが大統領選で息を吹き返しそうである。わからないからこそ知りたくなる。そんなアメリカの魅力を再確認したサバティカルであった。

(古井義昭)

2024年4月30日 発行

アメリカ学会

〒550-0001 大阪市西区土佐堀1丁目4-8

日栄ビル703A

あゆみコーポレーション内

Tel: 06-6441-5260 Fax: 06-6441-2055

<https://www.jaas.gr.jp/>

発行人 前 嶋 和 弘

編集人 渡 邊 真理子

印刷所 (株)国際文献社

〒162-0801 新宿区山吹町 358-5